

---

# 続：いつもミクと六方～タイホ君お花畑

煉火赤駈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続：いつもミクと六方くタイホ君お花畑

### 【Nコード】

N7736F

### 【作者名】

煉火赤駆

### 【あらすじ】

ある事件の捜査にきた熱斗、ロックマン、六方検事、ジャッジマンと、新曲のプロモーションに来たミクがばったり！ロックマンをEXE・しか知らない作者がロックミク書いたんだZE 亞北ネルもいます。

ちやらららちやっちやー  
ちやっちやっちやらら  
ちやらららちやっちやー  
ちやらちやら  
ちやらららちやっちやー  
ちやっちやっちやらら  
ちやっちやらちやっちやらちやっちやっちや

「何を口ずさんでいる？」

パソコンのマウスを操作している僕に、ジャッジマンが話しかける。

「あ、うん。『タイホ君』のテーマ」

『タイホ君』というのは警視庁刑事課のマスコットの名前だ。別名を『うごめくベニヤ板』という。

こここのところ仕事が忙しく、刑事課を訪ねる機会も多いので、耳についてしまった。

そう言えば一度タイホ君が証拠品になった時は、先輩この曲を口ずさみながらうなされてたなあ。

「ジャッジマン、そのデータ調べてくれる？」

「わかった」

僕が大手通販サイトなんかを覗いている理由は、いわゆる電子マネー盗難事件の捜査。

本来なら警察の仕事だけど、警察だけだと重要な証拠の見落としがあったりして危なっかしいから、自分の目で確かめに来た。ジャッジマンがデータを調べていると。

「あっ、そこにいるのはジャッジマンに検事さん！」

画面奥から青いロングツインテールの少女が走ってきた。

彼女は歌唱プログラムVOCALOIDの初音ミク。僕達のちよつとした友人だ。

「ミク。僕の名前は六方悟むかひあきらだから」

「あーっ、ジャツジマンに検事さん！」

別方向からまた「検事さん」と呼ばれて、僕は軽くずっこけた。

「ロックマンと熱斗君……」

もう訂正するのも面倒になってきたなあ。

こちらに向かってきた青いネットナビはロックマン、で、その真上のウインドウに表示されている顔は彼のオペレータの光熱斗君。

僕とはWWワールドスリー全盛期以来の旧敵同士だ。

「まさか、例の電子マネー盗難事件って、検事さんが……！」

「違うから」

早めに否定しておく。この子達は僕のことを名前：検事、職業：ハッカーだと思ってる節があるんだよね。

本当は名前：六方悟、職業：検事、副業：ハッカーだ。副業ならいいのかった？ よくないね。うん。理解した上でやってるよ。

「ってことは、熱斗君達も例の事件の調査に？」

「ああ、警察に任せっぱなしじゃ不安だからな」

考えることはみんな同じ……か。これでいいのかな、警察。

「ところで、ミクさんはどうして？」

ロックマンがミクに質問した。確かに、検事の僕とオフィシャルネットバトラーの熱斗君はともかく、VOCALOIDは事件の調査に関係ない。

「私は新曲の売りこみで……」

ミクはなぜかうつむく。

ああ、ミクは確かロックマンのことが好きなんだっけ。初々しいなあ。

「新曲！？ 聞きたい聞きたい！」

熱斗君が口を挟む。

「熱斗君、ダメだよ。まだ売り出し前の曲なんだから」

「え、えつと。大丈夫。プロモーション用の曲データ持って来てるから」

あ、そう言えばそのデータ、僕ももらった。

「ちよつと待って。今読み込むから　あれ？　おかしいなあ。確かにこのフォルダにしまったはず……」

「妙だ。あのフォルダ内に曲のデータは存在しない」

ジャッジマンが呟く。この短時間で解析したんだ。さすがハツカ一のナビ。と、自画自賛はこの辺にして。

「この間もらった曲データ、ミクのフォルダに転送して」

「わかった」

あまりミクにロックマンを待たせさせるわけにもいかないし。ね。

「あつ、あった！　じゃあ、歌うね」

ミクは透き通るような声で歌いはじめた。

鼻毛がホラ伸びてきて

鼻毛がホラ伸びてきて

鼻毛がホラ伸びてきて

鼻毛お花畑

……。何、この歌。

「すまん。刑事課の課長からもらった『タイホ君のテーマ』の曲データと間違えた」

あれ、そんな歌詞だったの！？

とにかく、ミクにあんなの歌わせちゃまずいよ！　特にロックマンの前で！

「ロックマン……！　その、今は違うの……」

ミクはすっかり黙り込んでいるロックマンに必死で言い訳している。

「……ぷっ」

ロックマンの肩が微かに動いた。

「あははははは！ ミクさんの声はいいね。どんな曲にも合ってるーん、これは一種の結果オーライ？」

「なーんだ。飽きた。寝る」

突然別の声スピーカーから流れる。どうやら電腦世界内では声は斜め上からしたらしく、ジャツジマン達が斜め上を見上げる。

僕もパソコンを捜査し、少しロングで様子を窺う。

商品棚の上にミクによく似た少女が座っていた。大きな違いと言えば、ツインテールの色が山吹色な事だろう。

「……亞北ネル！」

彼女は亞北ネル。ミクをライバル視するネット作業員らしい。

「妨害工作の一貫としてフォルダ内のデータを消してみたけど、助けられたみたいね。じゃあね」

言つと、ネルは棚の反対側に飛び降りた。

「あつ、待て！ 追うぞ、ロックマン！」

「うん」

ロックマンと熱斗君は棚の裏側に続くルートを走っていった。

「私は曲データをもらって来ないと。リンあたりに頼んでみよう。じゃあね、検事さん」

ミクはミクでもと来たほうへ帰っていく。

「まったく」

画面に一人残されたジャツジマンに、僕は呟いた。

「ツンデレでライバルに迷惑かけるのは先輩の専売特許なのに」

「さあ、そういう問題ではない」

これは後日談だけど、ミクの例の『タイホ君のテーマ』は動画サイトで細やかな話題になったらしい。VOCALOIDって強かだなあと感心した。

あと、これはもうひとつの後日談で、ゴドーさんの仮面から法廷の最中に鼻毛の歌が流れたらしいけど、なんでだかは知らないこと

エッセイ集

(後書き)

この小説は、「初音ミクにタイホ君のテーマ歌わせてみた」という動画に影響されて勢いだけで書いたものです。なんか、ネルが悪役ですみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7736f/>

---

続：いつもミクと六方～タイホ君お花畑

2010年10月8日15時41分発行